

第1分科会記録

特別支援学校及び特別支援学級の教育課程の現状と課題 II

～質問紙調査・面接による調査からみえてきたこと～

趣旨説明

長沼 俊夫 (国立特別支援教育総合研究所)

研究報告

金子 健 (国立特別支援教育総合研究所)

長沼 俊夫 (国立特別支援教育総合研究所)

日下奈緒美 (国立特別支援教育総合研究所)

実践報告

金澤 聡 氏 (青森県立弘前第一養護学校)

城門 千代 氏 (熊本市教育委員会)

司会

小林 倫代 (国立特別支援教育総合研究所)

第1分科会ではまず、長沼俊夫より研究趣旨説明がなされた。

前半の部では、金子健と長沼総括研究員より研究報告がなされた。その後、金澤聡氏より青森県立弘前第一養護学校における、学校の教育目標の具現と学部間連携の構築による教育課程評価への取組についての報告がなされた。本取組の成果は、学部間の系統性、連続性を見直したことと、指導内容の選択、組織を見直したことであった。また、課題は、指導内容相互の関連性や、指導内容と授業時数の計画性及び妥当性等が挙げられた。

後半の部では、日下奈緒美より研究報告がなされた。その後、城門千代氏より熊本市の特別支援学級における教育課程編成及び実施に関する取組についての報告がなされた。本取組として、特別支援学級初任者向けに児童生徒の実態に合わせた教育課程を編成するための7つの編成例を示していることや、コーディネーター等のネットワークを活かした総合的な支援体制を整備していること等が挙げられた。また、今後の取組として、管理職を含めた学校組織としてのバックアップ体制作り等が挙げられた。

(以上、要項 P 1 8 参照)

<参加者との質疑応答>

前半の部

参加者：具体的指導内容を系統化していく上での課題は、①教育課程の二重構造、②各教科等を合わせた指導、③指導内容の圧倒的多数があると思うが、弘前第一養護学校ではどのように取り組んでいるのか。

金澤氏：本校でも同様の課題はあるが、今年度は教育活動における目標設定について共通理解することに焦点をあて、段階的に研究を行っている。

参加者：教育課程評価の観点に関して、学習指導要領との関連性はあるのか。

長沼：教育課程評価の観点は、学習指導要領を基に作成している。

参加者：教育課程評価の方法の軸として、個別の指導計画を挙げていたが、個別の指導計画の中に教育課程評価を取り組んだ例はあるのか。

長沼：研究協力機関の中には、個別の指導計画の中で学習内容表とリンクさせて評価を行い、それら個々の取り組みを集めて教育課程全体を評価した例があった。

参加者：弘前第一養護学校では、本報告についてどれだけの時間をかけて研究を行ったのか。また、本報告の校内研究は前年度から事前に計画していたのか。

金澤氏：本校では、月に一回、一時間、終業時間を厳守して研究を行っている。校内研究の計画は前年度より作成し、段階的に実施している。

参加者：弘前第一養護学校は、現在の授業研究はどのように計画しているのか。

金澤氏：本校では、一年目は指導案の作成における目標設定のみ限定的に研究を行い、二年目はその目標設定をもとに授業の研究を行う予定である。

後半の部

参加者：熊本市が示している教育課程編成例について、障害種別には示していない理由を教えてください。また、現在の熊本市の支援体制に至った経緯を教えてください。

城門氏：熊本市では、障害種別でなく、児童生徒の実態に合わせた教育課程編成を行っていきたいという思いから、障害種別には示していない。また、特別支援教育推進計画において平成30年までの目標を定めており、それに向かって支援体制を整えている。

参加者：今後の考え方として、全ての教員が特別支援教育に一度は関わることで教員全体が特別支援教育の理解を深めることが必要なのか、または特別支援学級の担当者枠を決めてその専門性を高めていくことが必要なのか。

日下：インクルーシブ教育システム構築を推進する中で、どちらの考え方も重要である。

城門氏：熊本市は、全教員の理解はもちろんだが、特別支援学校教員免許状を有する特別支援教育推進の採用枠を担保している。

参加者：熊本市は、今後の取組として指導助言をすぐに受けられるシステムを挙げているがどのようなことを検討しているのか。

城門氏：まずは校内の経験のある先輩教員からの助言、次に特別支援学校教員や他校の専門性のある教員からの助言という流れを考えている。

参加者：特別支援学校は現在人数が増えている現状であるが、先進的な工夫はどのようなものがあるのか。

城門氏：特別支援学級担当者だけでなく、交流学級や専科の教員、管理職等の教員でチームを組むことが重要であると考えている。

参加者：ブロックのネットワーク作りに関する運営について教えて欲しい。

城門氏：熊本市では、多くの学校で特別支援教育コーディネーターが各学校に複数おり、それがブロックの拠点校が機能している要因である。

<まとめ>

長沼：今回、教育課程について特別支援学校と特別支援学級、それぞれの現状を明らかにし、新たな課題も示された。今後は、特別支援学校ではカリキュラムマネジメントに関する検討が必要となり、特別支援学級では成果物として出されるガイドブックの効果についても検討する必要があるだろう。